

研究会報告

第40回 東京医科大学内分泌代謝研究会

日時：平成9年12月9日（火）

午後5：30～6：50

場所：東京医科大学病院

本館6階 第一会議室

当番教室：脳神経外科学教室

1. ラットの妊娠過程における内皮依存性弛緩反応の変動
(東京薬科大学第二薬理学教室) 本多秀雄, 石原久幸,
田村和広, 向後博司

既に、我々はラットの妊娠後期において胸部大動脈リング標本の内皮依存性弛緩反応が増強されることを見出し、報告した(第38回 東京医科大学内分泌代謝研究会)。

今回、我々はラットの妊娠過程すなわち、妊娠前期(7日)、中期(14日)および後期(21日)における胸部大動脈リング標本の内皮依存性弛緩反応の変動について、比較検討した。Acetylcholineによる内皮依存性弛緩反応は非妊娠ラットに比べ妊娠ラットの前期(7日)、中期(14日)および後期(21日)において有意に増強された。これら期間内で比較すると、後期(21日)における内皮依存性弛緩反応の増強が顕著であった。血清estrogenレベルは妊娠期間中増加し、21日に最高値を示した。一方、血清progesteroneレベルは妊娠7日に既に高値を示し、14日に最高値を示したが、21日は低値を示した。以上の成績より、ラットの妊娠後期(21日)のみならず前期(7日)および中期(14日)においても、内皮依存性弛緩反応が増強されていることが見い出され、その発現機序としてestrogenのみならず、progesteroneの関与も示唆された。

2. 葉状腫瘍との鑑別が困難であった授乳期乳癌の1例
(外科学第三) 日馬幹弘, 蓮江健一郎, 海瀬博史,
加藤孝一郎, 青木達哉, 小柳泰久

(東京都がん検診センター) 松永忠東, 中村祐子

症例は39歳、女性。第2子出産後、放置していた腫瘍が急速に増大した。近医にて診断できず、当科受診した。右外上方に10×8cmの弾性硬、境界明瞭の腫瘍を触知した。臨床経過および画像診断にて葉状腫瘍と診断し、全麻下に腫瘍切除を施行した。腫瘍は限局性で切除は容易であった。組織学的には充実腺管癌であり、腫瘍の大部分は壊死組織で辺縁組織と血管周囲のみに癌細胞が存在していた。切除断端は陰性であったが、残存乳房および腋窩に放射線照射を施行した。術後、再発は認めず、美容上も良好な形態を示している。本例は腫瘍形成性に急速に増大したため、殆ど浸潤形態をとっておらず、葉状腫瘍との鑑別に難渋したものと考えられた。

3. HELLP症候群・常位胎盤早期剥離を来した産褥期に診断された原発性アルドステロン症の一例

(産科婦人科学) 杉山カ一, 鈴木良知, 磯和男, 白石賢也,
野平知良, 柳下正人, 舟山 仁, 高山雅臣

(内科学第二) 高田佳史, 小川 隆, 清見定道

原発性アルドステロン症は全高血圧患者のわずか0.1%~0.2%にみられるまれな疾患であるが、特に妊娠との合併はまれで現在までに数例の報告しかなくされていない。

今回の症例は39歳、1経産。今回の妊娠は初期より196/120mmHgと高血圧を認め、降圧剤の内服が開始されていた。妊娠24週、夜間に突然の呼吸困難および心窩部痛を来したため来院したところ、250/140mmHgの著明な高血圧を来しており、また血液検査からHELLP症候群と診断され緊急帝王切開が施行された。産褥16日目に血圧コントロール不良となり、また血清K値に下降を認めたため2次性高血圧を疑い諸検査施行したところ、左副腎腫瘍による原発性アルドステロン症と診断され、左副腎腫瘍摘出術が施行された。術後は、血圧の下降・血清K値の正常化およびアルドステロン値の改善が認められた。